

Title	言語哲学にとっての生物学
Author(s)	本山, 明日香
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 217-222
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12488
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

◇書評◇

言語哲学にとっての生物学

Joseph Laporte

Natural Kinds and Conceptual Change

Cambridge University Press, 2004

本山明日香

はじめに

本書 *Natural Kinds and Conceptual Change* は、Cambridge Studies in Philosophy and Biology シリーズの一冊として書かれた。このシリーズにはエリオット・ソーパーやキム・ステレルニー、デイヴィッド・ハルらが名前を連ね、生物学や生物学の哲学について様々な角度から書かれた著作が多く刊行されている。著者ジョセフ・ラポルテは言語哲学や形而上学、生物学の哲学などを専門とする哲学者であり、本書は彼の処女作となる。内容の特徴は、自然種 (natural kinds) ① という哲学的概念を生物学の事例を用いて詳細に論じている点にあり、またその考察を通じて生物学と言語哲学との交錯地点を取り扱う点にある。

ただし、その交錯点はあくまで言語哲学的な関心によって描き出されている。生物学、特に系統学 (phylogeny) から多くの事例を取り入れてはいるが、本書の全体を通して、著者の基本的な関心は言語哲学および科学哲学にある。本稿では以下に、第一章から最終章までの議論の概要を描き、最後にラポルテが言語哲学あるいは科学哲学における問題を扱うために生物学という分野を取り上げたことの意味について手短かに検討する。ラポルテは結局、生物学という分野の特徴を本書での議論に生かし切れなかったのではないかと、というのが私の見解である。

最初に、大まかに本書の構成を説明しておきたい。第一章では生

物学的種 (biological species) が自然種であり、それを表す名辞は自然種名辞であることが主張される。第二章ではその生物学的種類 (biological kinds) が理論的に重要な本質的特性をもち、自然種に関する言明は必然的に真であることが述べられる。第三章では、生物学的種名辞について、その本質が発見されたものなのか、それとも定義されたものなのか、が議論され、結局科学理論から得られた結果を発見とみなすことは誤りであると結論される。第四章は、化学的種名辞について同様の議論がなされる。そして概念の変化は、理論の変化と意味の変化両方の側面を持つことが明らかになる。第五章、および第六章では指示の因果論が理論の変化および意味の変化に関する哲学的問題にどのような光を当てるのかが検討される。第五章では特に共約不可能性 (incommensurability) というクーンの概念を、第六章ではクワインの分析性に関する批判をとりあげている。

一 自然種とその本質

第一章および第二章で論じられるのは、生物学的種と化学的種について、それが自然種であり、本質をもつということである。ラポルテによれば、生物学的種 (species) および化学的種は自然種 (natural kinds) である。自然種という概念はさまざまな問題を抱えていることが知られているが、彼は自然種が「自然」であることの根拠を、理論的重要性、説明価値に求める。

理論的重要性とは、現象の予測や制御にとって有用であることに他ならない。この観点から自然さを考えた場合に得られる利点とは、多くの理論において有用であればあるほど、またある理論における多くの観点において有用であればあるほど、より自然であると解釈されうるといふ点であり、この解釈が私たちの直観的解釈にも沿うという点である。生物学という分野に限ってみれば、生物学的種が、物理学や化学における種とは違って多くの例外を含んで成り立っているという事情があるが、ラポルテの解釈はこうした分野においても「自然な種」を認めることを可能にする。

ラポルテはなぜ自然種という概念を存続させようとしているのか。それは、種類 (kind) という概念を認めることで、自然種の本質にまつわる形而上学的必然性を考察することが可能になるからである。本質概念について第二章で、生物学的種類 (biological kinds) が理論的に興味深い本質、あるいは必然的に所有する特性をもち、自然種についての興味深い言明は必然的に真であることが論じられる。この章でラポルテは、全面的にクリプキの同一性言明の必然性に関する議論を取り入れ、それを種類名辞 (kind term) を含む言明、および理論的同一性言明へどのように拡張可能か検討している。

種類名辞に関しては、ラポルテは基本的にクリプキの線を踏襲し、それが固定指示子であるため、同一性言明は必然的に真であると述べる。だが理論的同一性に関しては、二つの問題を指摘する。まず、理論的同一性言明、ラポルテの例を用いれば「ほ乳類 \parallel 祖先グループGから派生する分岐群 (clade)」 \parallel 「鳥類 \parallel 祖先グループAから派

生する分岐群」などの言明は、一方に種類名辞、他方に記述を含んでおり、名辞同士の言明とは異なる。次に、記述を含んでいるために、意味の変化によって固定性が失われるのではないか、という危惧がある。ラポルテは前者に対しては約定によって固定指示子とすることが可能、で済ませる。後者に対しては意味の変化は通時的なものであるのに対し、固定性というの共時的であるから、意味の変化が固定性を脅かすことはない、つまりたとえ時代ごとに意味が変化していったとしても、ある時代においてある名辞が固定的だと言ふことは可能、と答える。

このようにしてラポルテは、理論的同一性は必然的に真であると言いうるとし、自然種に本質を認めていくが、他方でこれが経験的に真であることが発見されるようなものではない、とも述べる。クリプキやパトナムによれば、科学者は本質を定義しているのではなく発見していることになる。そのため彼らは意味の変化を認めず、科学者はずっと使われてきた名辞に新たな光を当てるのだとする。だがラポルテにとってはそうではない。確かに科学者は、何らかの関係や事実を発見するのかもしれない。しかし、それは直ちにそれまでの関係や事実のとらえ方が誤りであることを示すわけではない。たとえば「モルモットは齧歯目ではない」という成果を選ばなくてはならないわけではなく、他の仕方、例えば齧歯目の範囲を広げることの方を選ぶこともできたのである。

二 理論の変化と意味の変化

この辺りから徐々に明らかになってくるのは、ラポルテが意味の変化と理論の変化という二つの概念変化の可能性を認めているという点である。そしてこの二つの変化を用いてラポルテはクリプキ・パトナムとは異なる見解を打ち出す。一つは、名辞の意味について。名辞の意味は科学者の探求によって真であることが発見されるのではない。科学者は以前の使い方をより精確にするために、意味を精製している (refine)。もう一つは、理論について。理論は唯一絶対ではなく、別の理論が選ばれた可能性は常にある、それゆえ理論における本質は理論負荷的であり、理論ごとに異なりうる。要するに、ある種類の意味は、ある理論の中で精製され、変わっていく。その中でその理論における何らかの本質が定まっていくのである。ラポルテはこれを、分類学者と分岐学者が互いに異なる仕方種を定めているという事実を用いて説明する。²⁾

こうした考察からラポルテは、概念の改訂というものが、混乱や曖昧さが、経験的に新しい知見によって取り除かれることであると述べる。この曖昧さに関して四章で、化学的種名辞を取り上げながら論じる。様々な例を挙げているが (印象的なのはパトナムの双子地球の例に対置される重水素地球の例である)、ここでも一貫して主張されるのは、この混乱と曖昧さから抜け出したある名辞が何を指すのかは、科学者の決定に依存するのであって、決して何らかの発

見ではない、ということである。科学が進展するまである名辞が何を指示するのは決まらないし、それは私たちが決めるものなのであって、本質が常に存在していて、それを発見することによって名辞の指示が確定するわけではないのである。

三 指示の因果論と共約不可能性

さて、ラポルテの見解に従うと、名辞の使用は科学の洗練に伴って変化してきた。私たちは単にかつての使用の誤りを発見したわけではなく、それら名辞の使用を精製し、意味を変えてきたのであった。ところが、この意味の変化に伴う言語の不安定さはクーンの名な共約不可能性を呼び起こすのではないか。この懸念が第五章の主題となる。

共約不可能性が一番影響を及ぼすのは、科学の連続的進歩、という考え方に対してである。革命前と革命後の理論が共約不可能であるなら、両者を連続的な進歩とみなすことはできないのではないか。有望な解決策として持ち出されるのは指示の因果論 (causal theory of reference) である。因果論が依存するのは理論ではなく世界であり、要するに話者の話す語は範型的サンプルを通して世界と因果的に繋がっているというのが因果論のテーゼだからである。たとえ理論が変遷しても、世界に依存している因果論は名辞の連続性を維持することができる、それゆえ科学の連続的進歩という考え方も維持できるはず、というわけである。

しかし実際は、因果論は共約不可能性から科学の進歩を救うことはできない。というのも、そもそも指示に携わる話者が、名辞の使用に関して洗練されていないため、曖昧さを完全に排除できない。その結果さらなる使用の特定化が行われることとなり、これは名辞の意味を変化させる約定に等しい。結局因果論も、経験的探求によって名辞の使用の曖昧さが明らかにされた場合、その使用を精製するため、言語の変化を容認するという点で言語の不安定性を認めているのである。

そこでラポルテは五章後半で、言語の不安定性そのものについて検討する。そしてクーンの共約不可能性テーゼを、穏健な形で認めることを提案する。言語の一部に、科学革命を通じても変化しない中立的な名辞 (neutral terms) を認めるのである。彼の考えでは、ある名辞の意味や文の意味は変化しはするが、理論の変化に影響を受けない名辞の存在によって両理論はコミュニケーションでき、知識の方はそのまま蓄積されうる。ダーウィン以前の創造論はダーウィンとは異なる仕方です「種」という名辞を用いたが、ダーウィンはその使用を理解し、実際理解したうえで新しい理論に「種」という名辞を位置づけたのである。

こうして穏健な形で共約不可能性を理解すれば、言語的变化によって科学理論が変化したとしても、その変化が合理的進化であることを蝕むものは何もないのである。

四 指示の因果論と分析性

第六章では、指示の因果論が分析性から必然性を切り離すことができるのかについて考察される。ラポルテの見解では、概念改訂は理論の変化と意味の変化の混合物である。クワインは、理論の変化と意味の変化が区別不能であると論じて分析性を攻撃した。その後クリプキは、分析性概念と必然性概念とを区別し、指示の因果論によって形而上学的必然性を回復させるのに成功した。多くの論者は分析性を否定する一方で、この形而上学的必然性を擁護するが、この立場は問題ないのか、というのがラポルテの疑念である。

結局、ラポルテは指示の因果論に結びついた必然性を認めるのであれば、分析総合の区別も受け入れることになり、結果、理論の変化と意味の変化の区別を受け入れねばならない、と結論する。つまり因果論は、分析性を必然性から切り離すことはできない。なぜか。それはラポルテの見て取る分析性が、第一に分析的言明が必然的に真であり、それゆえそれを偽であるとすると形而上学的可能性がないという点で、改訂不能であること、そして第二に、もし分析性が存在すれば、それは理論変化と意味変化の区別を要求するからである。なぜ第二の主張のようなことが言えるのか。それは分析的言明の必然的真理が、理論の変化によっては偽となりえず、意味の変化によってのみ偽となるからである。つまり、分析的言明を認める限りは、両者は区別されなければならないのである。ところが、ラ

ポルテの見解では、理論の変化と意味の変化は、互いに関係しあい分離させることはできない。

結局指示の因果論が行うように見えた、必然性と分析性の分離は、幻想であった。分析的真理は、必然的真理の一種でしかなかったのである。

五 生物学と言語哲学——ラポルテの議論を振り返って

以上、述べられてきたラポルテの議論には興味深い論点が多く含まれているが、最大の難点は、生物学的知見から取り入れた事例がほとんど独自の役割を果たしていないことにある。つまり前半の生物学的種概念を用いた自然種に関する議論が、言語哲学における議論に対して新しい影響をもたらしているとは考えられない、という点である。

本書からはなぜ概念変化について述べるために、生物学的種概念を用いなくてはならなかったのか、その必然性がみえてこない。ラポルテの議論は、生物学的種概念を用いなくても言えるからである。だが通常は、ある事例を選択して何かを述べるといふことは、その事例によって他の事例では言い得ないことを言うためである。生物学の中でも分岐学という分野を選び、種概念を論じることによって、これまで自然種という哲学的概念には当てられなかった光を得るためである。

しかし、ラポルテの行っていることは、むしろこれまでの議論を

生物学的種概念に対して単に適用してみせているにすぎない。結局のところラポルテが行っている議論は、全体として、すでに言語哲学の中で幾度も論じられてきたテーマの焼き直しである。本書全体が、クリプキの『名指しと必然性』への批判的オマージュと見るとさえできるかもしれない。

ところが、現在言語哲学において求められているのはこれまでの議論の焼き直しではない。多くの哲学者が生物学という領域に進出しているのは、単に哲学議論の切れ味を試す材料を求めているのではない。生物である私たち人間という存在者が、言語を用いたり思考したりすることについて、生物をずっと考察してきた分野からの成果を取り入れればさらに考察が進むのではないかと期待するからである。しかし、本書におけるラポルテの仕方では、残念ながらそれは見えてこなかった。

注

(1) ここでは一貫して *natural kinds* に自然種という訳語をあて、その他の場合では基本的に *kinds* に種類、*species* に種という訳語をあてる。これらの語およびこれらの語を用いた熟語が初出の場合、そして以上に示した基本的使い方に対する例外の場合は訳語の後に () で原語を示すようにした。

(2) ラポルテはこの後さらに、たとえ一つの学派、一つの種概念しかない場合にも、種類の本質に関する成果は発見ではないと論じている。というのも、理論の内部において話者が意味を精製していく段階ごとに決定が下されるためそこに恣意性が不可避に入り込み、それゆえ選択の問題がなお存在するからである。従って、やはり本質に関する事柄

は発見ではなく、むしろ約定による決定である、と結論する。